

| | | | |
|------|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 | 号 |
|------|---|---|---|

主 論 文 の 要 旨

論文題目

出土木製品からみた原始集落の生業と生活

氏 名

黒須 亜希子

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、出土木製品への検討を通じて、弥生時代・古墳時代を中心とした原始集落の生業と生活について考察を行うものである。

第1章は「稲作と木製農耕具」として、主に水田を耕す道具である鋤鋤類について記述した。第2章は「木製調理具の展開」として、杓子・匙類を用い、土器や遺構との関係性に言及した。第3章は「布生産と木製紡織具」として、紡織具の変遷の具体相を探った。また第4章では「集落の生活と木質資源」と題して、木製品を実際に作成する用材の獲得についての私論を述べた。

第1章第1節では「近畿における直柄鋤の展開」と題し、弥生時代から古墳時代の集落の主要な生業である農耕に用いられた道具のうち、近畿地方から出土した鋤について検討を加えた。大阪府内の出土例を例として編年案を提示し、広鋤と狭鋤のセット関係からその相関性に言及した。その上で、狭鋤の特徴とその製作工程について考察を加えた。

第1章第2節では「「広鋤Ⅰ式」の成立」と題し、弥生時代前期に使用された直柄鋤の一種である「広鋤Ⅰ式」について検討を加えた。本稿では広鋤Ⅰ式がどのように成立、展開したかを解明するため、各地域の出土例と共伴する土器の年代から広鋤Ⅰ式が成立した地域を特定した。またその伝播経路や変遷について考察した。

第1章第3節では「泥除の再検討」と題し、広鋤の補助装置である泥除と、これを装着した泥除付き広鋤の機能について検討を加えた。本稿では、泥除および広鋤を装着装置の形態から再分類し、各地の出土例を整理することにより、その組合せをパターン化した。また遺物の実見観察から、具体的な方法の復元を試みた。さらに、これが湿田においてどう作用したのかを考察した。

第1章第4節では「西日本における鋤鋤類の組成」と題し、第1節～第3節までに整理した近畿地方の出土事例から西日本全域における鋤鋤類の出土例について、整理した。西日本出土の資料を同一視点で概観するために機種名称を整理し、続いて地域

ごとの出土例を示した上で、その関係を考察した。

第2章第1節では「調理具の変遷」と題し、木製調理具に分類される杓子と匙について、検討を加えた。主に近畿における出土例の分類および編年をおこない、その特徴を明示した。

第2章第2節では「容器と調理具の相関」と題し、前節において示した木製調理具の消長と、調理具の受け具である容器との組み合わせについて考察した。このうち近畿においてまとまった出土量が認められる縦杓子が、集落内の水を汲む道具であったことを見出した。

第3章第1節では「織機の構造と復原 ―出土紡織具研究のための基礎作業―」と題して、衣服の材料となる布を生産するため紡織具について検討を加えた。本稿では研究の前段階として、現存する民族具及び民具織機を使用痕跡の有無から参照し、弥生時代・古墳時代の紡織具の形状を探ることを試みた。

第3章第2節では「織機の導入と展開」と題し、各種の織機が導入された時期とその様相を明らかにした。本稿ではもっとも出土例が多い無機台機（原始機）の組合せ式布巻具を用いて、その導入と定着の様相を考察した。

第3章第3節では「紡織具からみた布生産の変革」と題し、出土織機部材と紡具の編年から、導入と伝播の様相を推測した。また、これに基づき、衣生産の変革と発展について既述した。

第4章第1節では「用材選択と木製品生産」と題し、木製品製作の際の用材選択について考察した。本稿では、近畿各府県のデータベースを比較し、改めてその特徴を示した上で、広葉樹と針葉樹の使用頻度の変化が何を契機として起こったのかについて考察した。

第4章第2節では「木製品の再利用」と題し、集落内における木製品の再利用について検証した。木製品を製作する際の用材が新たに切り出した樹木だけでなく、木製品を再利用したものが一定含まれることを考察し、その製作から消滅までの過程を復元した。

以上の論をふまえた上で、終章では「生業・生活の変化と木製品」と題し、弥生時代・古墳時代における生業及び生活と密接にかかわる道具である出土木製品の変革が何を要因にして起こったのかを考察し、本論文の総括とした。